

『960年聖書』冒頭挿絵「マイエスタス・ドミニ荘厳のキリスト」を巡って

毛塚 実江子

はじめに

本稿では、960年の年記を持つレオンのサン・イシドーロ王立参事会聖堂所蔵 (Cod. 2) の聖書写本 (以下『960年聖書』) 冒頭 (f.2) の挿絵「荘厳のキリスト」 (以下「マイエスタス・ドミニ」) を取り上げる (図1)。『960年聖書』は創世記からヨハネ黙示録までを収めた一卷本聖書であり、旧約聖書を中心に100点余りの挿絵が残されている。「マイエスタス・ドミニ」とは、マンドラや玉座、虹に座すキリストを、天使や四福音書記者の象徴などが取り囲む「主の顕現」図像である¹。『960年聖書』の作者の一人として名を残すフロレンティウスは、945年の『大グレゴリウスによるヨブ記註解』 (以下『ヨブ記註解』、マドリッド、国立図書館 Cod.80) においても、この主題を描いている (図10)。これらの二つの「マイエスタス・ドミニ」は、同じ主題を扱いながら、画面構成やモチーフ、背景の処理において大きく異なっている。『ヨブ記註解』はフロレンティウス個人による写本であることが明らかであるが²、『960年聖書』には弟子サンクティウスの名も記されているため、これらの差異は、同挿絵を含む『960年聖書』の作者同定の問題に関わることになる。本稿では『960年聖書』研究の立場から、同写本の「マイエスタス・ドミニ」の特徴に着目することで、この問題を考察したい。具体的には、新約聖書や福音書の冒頭に置かれるこの主題が、一卷本聖書である『960年聖書』の冒頭に配されていること、壮年で描かれるはずのキリストが白髪で表され、聖書を2冊持っているように描かれていること、四福音書記者の類例のない配置などの挿絵を巡る諸問題を整理する。そのうえで、『ヨブ記註解』の同挿絵および同写本の対観表装飾³との比較を行い、『960年聖書』の「マイエスタス・ドミニ」において、フロレンティウスが関与した可能性を検討したい。

¹ エゼキエル書 (1:10)、イザヤ書 (6:14)、ダニエル書 (7:9)、ヨハネ黙示録 (4:6-8) などに典拠を持つ。全身像が「マイエスタス・ドミニ」で、半身像は厳密には「パントクラートル」と呼ぶべきであるが、先行研究に倣い、「マイエスタス・ドミニ」とする。Van Der Meer, F., *Maiestas Domini, Théophanies de l'Apocalypse dans l'art chrétien*, Rome, 1938 (Van Der Meer, 1938), pp.315ff; Beissel, S., *Geschichte der Evangelienbücher in der ersten Hälfte des Mittelalters*, Freiburg im Breisgau, 1906 (Beissel, 1906), pp.49 (332) ff.; Schiller, G., *Ikongraphie der christlichen Kunst*, III, Kassel, 1971 (Schiller, 1971), pp.233-249; 辻佐保子「エゼキエルとイザヤの幻視—コプト修道院ならびにカッパドキア岩窟教会アプシス装飾の一主題と典礼の関係」、『オリエント』13、1970 (『ビザンティン美術の表象世界』岩波書店、1993, pp.45-97, esp., 45-53.)

² f.3にラビリント形式の献辞があり FLORENTIS INDIGNUM MEMORARE (取るに足らないフロレンティウスを覚えていてください) と記されている。

³ 同写本の対観表に関しては、2009年度に早稲田大学大学院文学研究科に提出した執筆者の博士学位請求論文「レオンの『九六〇年聖書』の対観表研究」(未刊行)を参照されたい。

1. 『960年聖書』の挿絵

『960年聖書』は、挿絵入り一巻本聖書として、10世紀イベリア半島のみならず、初期中世キリスト教美術を代表する貴重な一作例である。現状で大きさは縦47.5、横34.5、厚さ8.2cm、全517葉。テキストは西ゴート文字で51行、2コラムに渡って記される。f.514には、作者、すなわち写字生にして挿絵師のサンクティウス Sanctius とその師フロレンティウス Florentius の名が記されている。その直前の f.513v にサンクティウスによる奥付があり XIII klds (kalendas) ils (Julias) era DCCCCLXLVIII (西暦では960年6月19日)の日付が認められる。制作地はブルゴス近郊のバレラニカ修道院と推定され、レオンには12世紀までに移管されていた⁴。フロレンティウスは写字生、挿絵師として記録を残すが、その弟子サンクティウスについては詳しいことは知られていない。同写本は、冒頭の「マイエスタス・ドミニ」(f.2)、「キリストの系図」に数点の人物像(ff.5v-10)、目次に1対の天使(f.4v)、旧約聖書に92点の挿絵を含むが、新約聖書の挿絵は、対観表(ff.396v-404v)の福音書記者像を除けば、4点のパウロの肖像とf.514の作者の肖像のみである。挿絵のほとんどがコラムとテキストの間に描かれ、フォリオ全体を占める大きさで描かれた挿絵は2点しかない。「マイエスタス・ドミニ」はそのうちの1点であり、写本全体から見ても主要な挿絵として着目される⁵。同写本のテキストにはウルガタ訳以前の古ラテン語が含まれているため、聖書学、古文書学研究では早くから着目されていた⁶が、美術史的な研究は1960年代になってようやく着手された。ウィリアムズを始めとして図像学的な考察が行われ⁷、カロリング朝写本や古典古代の作例からの影響が指摘されたが⁸、比較作例が乏しいことから伝播系統を推定することは困難であり、『960年聖書』の挿絵は解明すべき点が、今なお多く残されている。

⁴ Llamazares, J.P., *Catálogo de los códices y documentos de la Real Colegiata de San Isidoro de León*, León, 1923, pp.18-24.

⁵ もう1点はレビ記9章の「臨在の幕屋」(f.50)である。同写本の旧約聖書挿絵については稿を改めたい。

⁶ 1587年にレオンの司教フランシスコ・トゥルグイジョにより、同写本の旧約聖書のテキストの一部が校訂テキスト用としてヴァチカンに送られている。Ayuso, T., *La Vetus Latina Hispana. Origen, dependencia, derivaciones, valor e influjo universal.1: Prolegómenos. Introducción general, estudio y análisis de las fuentes*, Madrid, 1953, pp. 354-355.

⁷ Williams, J., *Illustrations of the León Bible of the Year 960: an Iconographic Analysis* (Ph.D.), University of Michigan, 1962 (Williams, 1962). その後は1999年に、古文書学、美術史、歴史、各分野による20点の論文集で同写本のファクシミリ解説書 *Codex biblicus legionensis: Veinte Estudios*, 1999, León, 1999. (*Veinte Estudios*, 1999) が公刊された。

⁸ 図像の比較作例は、ウィリアムズらによって、3世紀のシリアのシナゴグ遺跡であるドゥラ・エウロポスまで探求された他、カロリング朝時代の『サン・パオロ・フォリ・レ・ムーラの聖書』(サン・パオロ・フォリ・レ・ムーラ聖堂 s.n.)、『シュトゥットガルト詩篇』(ヴュルテンベルク州立図書館 ms.23)、『トゥールのモーセ五書』(パリ、国立図書館 ms. lat. nouv. acq.2334) 等と比較された。先行研究は以下にまとめられている。Williams, J., "The Bible in Spain", *Imaging the Medieval Bible*, Princeton, 1999 (Williams, 1999), pp.216-218; Silva y Verástegui, S., "La iconografía de la Biblia de San Isidoro de León", *Veinte Estudios*, 1999 (Verástegui, 1999), pp.187-206.

2. 冒頭挿絵「マイエスタス・ドミニ」

『960年聖書』の「マイエスタス・ドミニ」(図1)は、イベリア半島の現存する聖書写本としては945年の『ヨブ記註解』のそれに次いで古い作例である。二重に縁取られた中央のメダイオンにキリストが顕現し、福音書記者像の描かれたメダイオンが四隅を囲む。キリストは上半身で十字のニンブスをいただき、白髪無髯で、左手に聖書を抱え、右手で祝福のポーズをとる。ただし手は胸の前に置かれる。周囲の福音書記者像は、左上から右上に反時計周りに、ルカ、マルコ、マタイ、ヨハネが、それぞれ牡牛、獅子、人、鷲の、獣の象徴(シンボル)で描かれている。獣のシンボルはすべて全身(獣身)像、マタイ(人)のみが半身像で巻物を広げている。画面は植物文様で枠取られ、それぞれのメダイオンと枠の余白も装飾的に処理された帯状の植物で埋められている。

同挿絵は「マイエスタス・ドミニ」の主題であるキリストと福音書記者像、という共通の特徴を備えている。しかし、同時代あるいはそれ以前の作例と比べても、キリストが2冊の本を持っているように見える点、福音書記者像の配列順において類例のないことが、ウィリアムズによって指摘されていた⁹。これに加えて、ベラステギは、キリストが白髪無髯、胸元に金の帯らしき装飾がある点も注目すべき特徴として指摘している¹⁰。

中央に大きなメダイオンを、その四隅に小さなメダイオンを配すこの画面構成は、すでに9世紀の『カーバ聖書』(Cavensis, La Cava dei Tirrenii 修道院図書館、ms.membr.I)の十字架(f.1v)や920年に制作された聖書写本(レオン大聖堂 Cod.6)の四福音書記者像(ff.202, 209, 211, 214)にも見られる。さらに円形のマンデルラに描かれる肖像や、獣のシンボルによる福音書記者像、十字架ニンブスを持つキリスト像などは、メロヴィング朝の写本に先例を見ることができる。例えば、図2『グンドヒヌスの福音書¹¹』(オータン市立図書館 ms.3)の「マイエスタス・ドミニ」(f.12v)は、天使やキリストの描写は異なるものの、四隅に福音書記者像のシンボルが獣身で描かれたメダイオン、中央にキリストが顕現している点は『960年聖書』の構成と共通している。これに対し、カロリング朝の福音書写本の「マイエスタス・ドミニ」においては、福音書記者のシンボルは聖書を携えた獣身で描かれ、同挿絵は福音書の前に配される。『960年聖書』と同様の一巻本聖書で、8世紀の半ばにトゥールのサン・マルタン修道院で制作された『ヴィヴィアンの聖書』(パリ、国立図書館 ms. lat.1)においては「マイエスタス・ドミニ」(f.329v)は新約聖書の直前に置かれている(図3)。このように、「マイエスタス・ドミニ」が占めるのは福音書か新約聖書

⁹ Williams, 1962, p.45; Id., *The Early Spanish Manuscript Illumination*, New York, 1977 (Williams, 1977), pp.55, 72.

¹⁰ Verástegui, 1999, p.188.

¹¹ 『グンドヒヌスの福音書』については Nee, L., *The Gundohinus Gospels*, Cambridge, 1987 (Nee, 1987), pp.131-188. 他の類例としては9世紀『ランドベネックの福音書』(ニューヨーク公立図書館 ms.115)の「マイエスタス・ドミニ」(f.12v)が挙げられる。枠取りされたページや、メダイオン周囲の余白部分に装飾文様が配されている点が『960年聖書』と共通しており、キリスト像が半身で聖書を持つ点、5つのメダイオンのうち、中央のみ二重に枠取られている点など、細部も類似している。

の冒頭であり、『960年聖書』のように、一卷本聖書の冒頭に置かれることは稀である¹²。特異な位置を占めるこの「マイエスタス・ドミニ」はどのような意図のもとに制作、配置されたのだろうか、まずは挿絵の個々の図像を確認することから始めたい。

3. キリスト像

図4は執筆者によるキリスト像部分の描き起こしである。白髪無髯のキリストは、おそらく星か十字架の装飾のある「ガラスの海」(黙4:6)の記述に対応する青緑色の背景に描かれ、襟から胸にかけて黄色の帯のある赤い長衣を纏っている。キリストの右手側の8本線、左手側の4本線を交差させた光輝のような装飾は、それぞれ日月の象徴であろう。左手に抱えられているのは明らかに冊子本の聖書であるが、右胸部分の黄色の帯が、服の装飾か否かは判然としない。この矩形部分を含めて、ウィリアムズは「2冊の書物」と数えたのだろう¹³が、十字形の文様は襟元部分から連続しており、執筆者はベラステギと同様に、衣の装飾と解釈する¹⁴。これに対して、右手の甲の部分から伸びた黄色く細長い矩形は、胸元の黄色の地とは明らかに異なる縦横の細い線が入っている。これも布の肩部分の装飾かもしれないが¹⁵、同写本の他の挿絵にはない表現である。これを書物と見るなら、冊子本というよりは、巻かれた状態の「巻物」のようである。それに対して、左手に抱えられた矩形の書物は、装丁とも見える植物文様のついた大型の書物(冊子本)のように表され、それを支える左手の袖口は円の枠から僅かにはみ出している。このキリスト像に関してウィリアムズは、カロリング朝の作例と比較し、『960年聖書』の「マイエスタス・ドミニ」は、玉座に腰をかける全身像ではなく、上半身しか描かれていない点に着目し、衣や本の処理からも、これらの特徴はフロレンティウスが図像学に詳しくなかったためと解釈した¹⁶。このキリスト像を同写本のヨブ記に顕現する神の像(図5)と比較すると、上半身像で、左手に聖書を持ち、右手で祝福の仕草をし、黄色いショールのような布に両腕が覆われている点が共通している。しかし一方で、頭部にはニンブスもなく、黒髪の部分もうかがえる。図4と図5は構成が類似しているためモデルを共有した可能性があるにしても、前者のキリスト像の特徴的な描写は

¹² Suárez González, I. A., "Arqueología del Códice", *Veinte estudios*, 1999, pp.87-110, esp., 90. f.2v のクワイヤは不規則だが「マイエスタス・ドミニ」が最初のフォリオであった可能性が高いと結論している。

¹³ ウィリアムズは「祝福を与えている手にもう一冊の本を持っている」、とする。Williams, 1962, p.45.

¹⁴ Verástegui, *Iconografía del siglo X en el Reino de Pamplona*, Pamplona, 1984 (Verástegui, 1984), p.181.

¹⁵ 例えば、古くはラヴェンナのサン・ヴィターレ聖堂(6世紀)アプシスのモザイクに表された無髯で巻物を持つ青年キリストなどに見られる右肩部分の装飾の残存かもしれない。

¹⁶ "lack of familiarity with such an iconography"としている。本を持ったキリストは司祭としてのキリスト、聖職者の法衣をまとったキリスト(chirst in a stolem as hight priest)の表現であり、スペインの典礼において、ミサ奉献文の冒頭で司祭が朗唱する叙唱で、キリストが「罪のない真の司祭」と称えられていたことと関連付けている。しかし、司祭としてのキリストの図像についてはビザンティンの壁画に先例があるのみで、確かに手の甲を向けて本を持つ表現は共通するものの、その特徴である短い髭や頭頂をそった剃髪 tonsure は認められない Williams, 1977, p.55; Zarras, N., "Christ EN ETEPA MORΦH", *Deltion, periechontas ergasias tes Etaireias*, Athenai, 2007, pp.213-224, esp., 223-224; Wessel, K., *Reallexikon zur byzantinischen Kunst*, "Christusbild," cols.1027-28.

際立っている。

『960年聖書』に先行する、白髪のキリストによる「マイエスタス・ドミニ」の作例としては、6世紀のシナイ山聖カタリナ修道院のイコンの「マイエスタス・ドミニ」が挙げられる。銘文は、通常では幼児のキリストに付されるエマヌイル Ε(μμ)ανουήλ であるにも関わらず、キリストは白髪白髯で描かれ、右手で祝福をし、左手に書物を広げ、おそらくは「四つの生き物」(エゼ 10:12)を背景に、虹の玉座に座し(エゼ 1:4-28)、「ガラスの海」を連想させる球体に足を置いている¹⁷。ヴァイツマンによれば、このキリストは、受肉したロゴスであり、幼児キリストを表すエマヌイルの銘文を持ち、全能の支配者パントクラトールのポーズで表され、「日の老いたる者」の白髪白髯で描かれる、それぞれの要素が合成された図像¹⁸と解釈されている。

『960年聖書』以降の現存作例としては、例えば10世紀末頃に、サン・ミリヤン・デ・ラ・コゴーリヤ修道院で制作されたとされるベアトゥス本(修道士ベアトゥスによるヨハネ黙示録註解写本)の一冊、エスコリアル写本(エル・エスコリアル修道院図書館、Cod.&II.5)の「天の大群衆が玉座の神を礼拝する」(黙 19:1-10)挿絵(f.142v)が挙げられる(図6)。黙示録を通して神の顕現する場面は、「見よ、その方が雲に乗って来られる」(黙 1:7)、「天上の玉座に坐す神のヴィジョン」(黙 4:1-6)、「小羊、四つの生き物、長老たちのヴィジョン」(黙 5:1-14)、「神の顕現」(黙 19:1-10)、そして「最後の審判」(黙 20:11-15)である。ベアトゥス本の挿絵においては、ダニエル書の「日の老いたる者」(ダニ 7:9)に由来する「白髪の日の老いたる者のヴィジョン」(黙 1:10-20)が描かれるが、顕現する神が白髪で表されることは少ない。特に四つの生き物として描かれる四福音書記者とともに明確に白髪として表現されている作例は、1047年、レオン＝カステイーリヤ王フェルナンド一世と王妃サンチャのために制作されたファクンドゥス写本(マドリード、国立図書館 ms.Vitr.14-2, f.46)および、1086年の年記を持つオスーマ写本(ブルゴ・デ・オスーマ大聖堂 Cod.1, f.23)のみである。コゴーリヤ写本(マドリード、王立歴史資料館、Cod.Aemil.33, f.20)では、あいまいとはいえ、他の頭髪との区別が認められ、12世紀初頭に描き足された「マイエスタス・ドミニ」に白髪のキリストが見出される(f.92)。これらの白髪の表現が見出されるベアトゥス本の多くは同系統に属し¹⁹、それゆえ同一の図像の伝播が想定される。例外はモーガン写本(ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館 Ms.644)で、f.83の「玉座のヴィジョン」において白髪の表現が認められた。

¹⁷ シラーは「それゆえ、わたしの主が御自ら／あなたたちにするしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み／その名をインマヌエルと呼ぶ。」(イザ 7:14)を引用し、ギリシアの降誕祭の典礼と関連付け、「日の老いたる者」(ダニ 7:9)が「エマヌエル」と同様に描かれるとする。Schiller, 1971, pp.394ff.

¹⁸ Weitzmann, K., *The Monastery of Saint Catherine at Mount Sinai, The Icons, 1: from the 6th to the 10th century*, Princeton, 1976, pp.41-42, fig. B16.

¹⁹ ノイス、クライン双方の系統図によっても第一系統に分類されている。Neuss, W., *Die Apokalypse des hl Johannes in der altspanischen und altchristlichen Bibel Illustration* (Das problem der Beatus-Handschriften), Münster in Westfalen, 1931 (Neuss, 1931); Klein, P. K., *Der altere Beatus-Kodex Vitr.14-1 der Bibliotheca Jacional zu Madrid*, Hildesheim, 1976, pp.287-289.

ベアトウス本以外の同時代の作例では、10世紀末のサン・ミリャン・デ・ラ・コゴーリャ修道院で制作された『教会会議議事録』（エル・エスコリアル王立修道院図書館 a.1.13, f.16v）にも見出される（図7）。白髪のキリストと礼拝する天使、アルファとオメガ、銘文²⁰はすべて黙示録に基づく挿絵である。サン・ミリャン・デ・ラ・コゴーリャ修道院の『説教集』（マドリード、王立歴史資料館 Cod.39）の作例も示唆的である（図8）。同図は『説教集』の「ヨハネ福音書」冒頭（f.254v）であり、メダイヨンに現れた白髪無髯の神が表されている。ウィリアムズはこの作品を例証として、たとえ白髪であっても、本来的に神の顕現図は福音書の冒頭を飾るべきものであったとし、『960年聖書』のような一巻本聖書の冒頭に「マイエスタス・ドミニ」が配置された点に、改めて疑問を呈した。しかしベラステギは、逆にこの点に着目し、ヨハネ福音書の冒頭という、天地創造以前に存在した「ロゴス」を語る箇所置かれた図8の白髪のキリストも同様に「ロゴス」を表す、とした²¹。さらにベラステギは『960年聖書』においても、この解釈は適用されるとする。加えて同写本の冒頭の詩句（f.4）²²が「マイエスタス・ドミニ」と共通する枠装飾に囲まれていることから、ベラステギは詩句と「マイエスタス・ドミニ」のキリストが同様に言葉、つまり「ロゴス」を象徴する裏付けであるとした²³。確かに、「ロゴス」であるならば、ヨハネ福音書で語られるとおりに、天地創造を語る創世記に先立つ一巻本聖書の冒頭に「マイエスタス・ドミニ」が配されたことも説明がつくだろう。

以上を踏まえて、改めて着目されるのは『960年聖書』の「マイエスタス・ドミニ」のキリストが赤い衣を纏っている点である。これは同写本の他の挿絵と比較しても、右下のメダイヨンのマタイと比べても、衣を強調するかのようには襷が描きこまれている。『960年聖書』冒頭の「キリストの系図」の最後に描かれた「天使と聖母子」（f.10）の幼児キリストもまた、赤い衣に包まれていることが想起される。同写本で明らかに「キリスト」として描かれているのは、この2箇所のみであり、同じ冒頭挿絵の中での「マイエスタス・ドミニ」のキリストと幼児キリストとの対応関係は注目に値するだろう。

²⁰ 左上ケルビム cervfin (sic)、右上セラフィム cerafin、左下ミカエル micael、右下ガブリエル gabriel、ひし形の上に A と Ω、中央の銘文に「わたしはアルファでありオメガである、神であり、人である alpha et o(mega) initian et finis d(ominu)s et homo」とある。黙示録 1, 21, 22 章に対応する。

²¹ Verástegui, 1984, pp.81-83, 181-184.ベラステギは説教集の図像の分析し『960年聖書』を「ロゴス」の比較例として挙げている。「ロゴス」については以下を参照している。S. de Ausejo, Cap., “¿Es un himno a Christo el prólogo de San Juan? Los himnos christológicos de la iglesia primitiva y el prologo del IV Evangelio”, *Estudios Biblicos* 15, 1956, pp.223-277, 381-427.

²² 『960年聖書』の ff.11-12 の対句の一部（141-144）に関して、フィッシャーはテオドルフの詩句を改変したものとした。Veinte Estudios, 1999 において『960年聖書』のテキスト解説を担当したガルシア・デル・フェンテは、テオドルフの詩句のレイアウトが一致することと、テオドルフが当代の詩人として知られていることを考慮したうえで、フィッシャー説を採っている。García de la Fuente, O., “El Codex Biblicus Legionensis y la introducción de la Vulgata en España”, *Veinte Estudios*, 1999, pp.269-279., esp., 272; Fischer, B., “Algunas observaciones sobre el ‘Codex Gothicus’ de la R.C.de S. Isidoro en León y sobre la tradición española de la Vulgata”, *Archivos Leoneses* 15, 1961, pp.5-47, esp., 11.

²³ Verástegui, 1984, p.184.

さらに同写本の対観表 (f.400) の装飾枠の一部に「エマヌエル emanuel」の銘が認められる点も指摘したい²⁴。同句は第5の対観表の内容に関連して書き込まれたものである。これに似た例は、9世紀初頭のカロリング朝を代表する福音書『サン・メダール・ド・ソワッソン福音書』(パリ、国立図書館 ms.lat.8850) にも見出される。この福音書の対観表では、同じ第5の対観表装飾 (f.10v) に、2天使の掲げ持つマンドルラの中に顕現するキリストが描かれている²⁵。キリストは十字架のついた杖を肩に掲げて左手に聖書を広げ、無髯で少年のような若い姿で描かれている。この直前までの対観表はすべて聖書を持つ獣身のシンボルによって装飾されているため、『960年聖書』と同様に第5の対観表がこの図像が描かれる起因となったと考えられる。同福音書と『960年聖書』との直接の関連性は不明であるものの、この共通点は興味深い。少なくともキリストの描写において、挿絵師であり写字生でもあったフロレンティウスとサンクティウスが聖書のテキストにも通暁しているばかりか、エマヌエルという言葉に関して特別の注意を払っていたことが確認できる。

また、『960年聖書』は、それ以前に成立したベアトゥス本のいずれかと接していたことは疑いえず、「マイエスタス・ドミニ」のキリストの胸を覆う黄色の装飾は「日の老いたる者」が胸に締める「金の帯」と解釈してよい²⁶。ベアトゥスによれば「天上の神が胸に締める金の帯は、旧約の律法と新約の福音を表す」からである²⁷。かくしてこのキリスト像は、ダニエル書、黙示録の「日の老いたる者」の姿をとりながらヨハネ福音書の「ロゴス」を表し、それにゆえに新約と旧約の双方を象徴する図像ではないかと考えられる。

4. 福音書記者像

次に、この「マイエスタス・ドミニ」の福音書記者像について考察する。ここでは福音書記者はマタイを除いて、獣身のシンボルで描かれている。図9も執筆者による描き起こしであるが、マンドルラの背景にも中央のキリストと同じような光輝の装飾が認められ、メダイヨンの内枠に沿うように巻物を広げている。ルカ(牡牛)はページの中央に背を向け、右前足をやや挙げながら、左後方を振り向いている。腹部の渦巻文様の装飾や毛、蹄などの細部は同写本の他の牡牛の描写と共通しているが、頭部は側面ではなく四分の三面観で描かれる。この表現は、対観表に描かれる牡牛 (ff.399, 400v) と同様である。旧約聖書の各挿絵においては、牡牛はほぼ側面観で描かれ

²⁴ 拙稿「レオンの『960年聖書』写本の対観表装飾—福音書記者像表現を巡って」『美術史』、165冊、2008、pp.147-161, esp., 152-153.

²⁵ Friend, Jr. A. M., "The Canon Table of the Book of Kells", *Medieval Studies in Memory of A. Kingsley Porter*, 1, Cambridge, 1939, p.626; Underwood, P. A., "The Fountain of Life in Manuscripts of the Gospels", *Dumbarton Oaks Papers* 5, 1950, pp.41-138, esp., 69, n.105; アンダーウッドはこの対観表の解釈についてグラバールの未出版の論文"Les plus anciennes images de la Fontaine de Vie" (1946) を紹介している。

²⁶ ウィリアムズはこれを「装飾」と考えた。Williams, 1962, pp.45-46.

²⁷ ベアトゥスはそのヨハネ黙示録註解一書 205節で、「永遠の力と主が流された血 *Zona aurea virtus eius est sempiterna sanguine Dominicæ passionis adpersa*」と解釈している。Beato de Liébana, *Obras Completas de Beato de Liébana*, (eds.) Echegaray, J. G., A.del Campo, Freeman, L.G, Madrid, 1995, p.94, col.205.

ており、この背後を振り返る描写はむしろベアトゥス本のモーガン写本 (f.2v)、ジローナ写本 (ジローナ大聖堂宝物館 Num. Inv. 7 (11)) の冒頭挿絵 (f.6v) に共通する。細長い胴体や肩口からの翼は様式化されているように見える。マルコ (獅子) もルカ同様に、中央に背を向け、右足を挙げ、後方を向き、尾の先が様式化された三角形となっている。この獅子は対観表 (ff.398, 403) および、フロレンティウスによる『ヨブ記註解』冒頭の装飾にも描かれている²⁸。マタイ (人) のみ半身像で、大きく広げた両の手に巻物を掲げている。ニブス、衣の表現ともに同写本の人物表現と共通する。ヨハネ (鷲) もまた頭部を後方に向け、両足の爪で巻物をつかむ姿で描かれている。ヨハネの左右の翼は外枠からはみ出るように描かれ、ルカやマルコの翼と形が共通し、マタイの翼のみが根元に球状の折り返しがあり、僅かに異なっている。ルカ、マルコ、ヨハネのシンボルの後方を振り返るというポーズはすでにカロリング朝の福音書写本²⁹に現れている。シンボルが巻物を広げる描写もまた、カロリング朝の福音書写本に散見される³⁰が、これに対し、イベリア半島に現存する『960年聖書』他の同時代の写本挿絵においては、福音書記者は獣身のシンボルか、獣頭人間型で描かれている。特に福音書記者が聖書を持つ場合は、獣身よりも獣頭人間型で描かれることが多く、手にする聖書は冊子本である (図 10、11)。この傾向は『960年聖書』の対観表の福音書記者像でより明らかに現れている。つまり『960年聖書』の「マイエスタス・ドミニ」の福音書記者像に見るような巻物を持つ獣身のシンボルは、同写本においてさえも例外的なのである。これを、おそらくカロリング朝以前の作例から写したため、と理由付けることも可能だろうが、フロレンティウスはすでに 945 年には『ヨブ記註解』の「マイエスタス・ドミニ」において獣頭人間型の福音書記者に冊子本の聖書を持たせており、少なくとも『960年聖書』の「マイエスタス・ドミニ」においては巻物が選択されたことは明らかである。

例えば、図 3 の『ヴィヴィアンの聖書』の「マイエスタス・ドミニ」では、菱形の中に二つの円弧を重ねたマンドルラ内に天球に乗ったキリストが顕現し、菱形の内部と円弧の枠の間には獣身のシンボルで冊子本の聖書を持つ福音書記者が、菱形の内角には巻物を手にした預言者が表され、挿絵の四隅には筆記をする福音書記者が配されている。『ヴィヴィアンの聖書』は新旧一巻の聖書であるために、旧約聖書の預言者像も共に描かれているが、福音書記者が冊子本の聖書を、預言者が巻物を手にしている点が注目される。同じ一巻本聖書である『サン・パウロ・フオリ・レ・ムーラの聖書』の「マイエスタス・ドミニ」 (f.259v) においても、預言者が持つ聖書は巻物、福音書記者が手にするのは冊子本と描き分けられている。この描写は、シャピロによって歴史的

²⁸ Williams, "The Moralia in Iob of 945: Some Iconographic Sources", *Archivo Español de Arqueología* 45-47, Madrid, 1972-1974, pp.223-250, figs.7-10.

²⁹ Cook, W.W.S., "The Earliest Painted Panels of Catalonia", 2, *The Art Bulletin* 6, 1923, pp.52-53. 球に座し、右手に *mundus* を持ったキリストはジローナ写本の「マイエスタス・ドミニ」 (f.2) との関わりも指摘されている。

³⁰ 例えば『アダの福音書』 (トリーア、市立書館 ms.22) ではシンボルは巻物を広げて、福音書を書写す姿で描かれた福音書記者らに靈感を与えている (ff.15, 85)。イベリア半島においては挿絵入りの福音書写本は現存していないこともあり、福音書を筆記する記者像は残されていない。

な背景と巻物の優位性によるものと指摘された³¹。『960年聖書』もまた、一卷本聖書である点が共通しており、直接的な類縁関係はなくとも、「マイエスタス・ドミニ」の福音書記者がすべて巻物を持つのに対し、新約聖書の直前に置かれた対観表では、福音書記者はすべて冊子本の聖書を持っていることが改めて着目される。

すでに述べたように「マイエスタス・ドミニ」においてキリストの「日の老いたる者」の描写を考慮するなら、福音書記者の手にする巻物は旧約聖書を表すのではないか。そして、メダイヨンのキリストが冊子本聖書と巻物を持つ、とするなら、それによっても旧約と新約の両聖書が象徴されているのではないだろうか。

5. 福音書記者像の配置

「マイエスタス・ドミニ」の四福音書記者のシンボルは、キリストを囲んで、左上から右上に反時計回りにマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネと福音書の順番に配されることが多く³²、すでにカロリング朝写本作例においてはそれらの配置は数パターンに分けられる³³。これに対し、『960年聖書』の「マイエスタス・ドミニ」の福音書記者像は、右下から右上に反時計回りに配されている。他の福音書記者の配置に先例はあるが³⁴、ルカが左上となる作例はほとんど残されていない。この例外的な配置についてウィリアムズは、プレ・カロリング朝との共通のソースを想定しながらも、カロリング朝以前においては福音書記者像の順番があいまいであったと指摘し、図像表現が定まらず、混乱があったための配置としている³⁵。ルカを左に配する作例をウィリアムズは『トリリアの黙示録』（トリリア、市立図書館 Cod. 31）の f.61v のみとしている³⁶が、実は同写本の f.23v の「小羊の礼拝」にも見られる。『トリリア黙示録』とベアトウス本はテキストと様式の差から、ノイスによって関連が否定されたものの³⁷、「神の顕現」の場面と「小羊の礼拝」場面では

³¹ Schapiro, M., "Two Romanesque Drawings in Auxerre and Some Iconographic Problems", *Studies in Art and Literature for Belle da Costa Greene*, 1954, pp.331-349. (rep.1977, in *Romanesque Art*, pp.306-327, esp.,307.)

³² 例えば『アミアティヌス写本』（フィレンツェ、ラウレンツィアーナ図書館 ms Amiatino I, f.796v）、アジベールの石棺（ジュアレー修道院、7世紀）など。シンボルの組合せについては以下を参照。Beissel, 1906, pp.49-51; Van Der Meer, 1938, pp.316, 319, 322; Werner, M., "The Four Evangelist Symbols Page in the Book of Durrow", *Gesta*, 8, No. 1, 1969, pp.3-17.

³³ トゥール派でもっとも古い作例である『グランヴァルの聖書』（大英図書館 Add.10546, f.352v）や830年頃の聖書（シュトゥットガルト、ヴェルテンベルク州立図書館 Cod. H. B. II, 40, f.1）、『デュフェイの福音書』（パリ、国立図書館 ms.lat.9385, f.179）、『プリュムの聖書』（ベルリン、国立図書館 Cod. Theol. lat. fol.733, f.17v）が該当する。

³⁴ 例えば『ロルシュの福音書』（アルバ・ユリア、バツィアネウム図書館 ms.R.II.1, ヴァティカン使徒図書館、Cod. Pal.lat.50（分蔵））f.18vの「マイエスタス・ドミニ」においては円形に配された福音書記者像はマタイが下、マルコが右、ヨハネが上、ルカが左である。

³⁵ Williams, 1962, pp.46-47, 53-54.

³⁶ Snyder, J., "The Reconstruction of an Early Christian Cycle of Illustrations for the Book of Revelation—The Trier Apocalypse", *Vigiliae Christianae* 18, 1964, pp.146-162, esp.,152, figs.2, 5; Van Der Meer, 1938, figs.31, 67; Williams, 1962, p.42.

³⁷ Neuss, 1931, pp.37ff.

福音書記者像は必ず描かれており (ff.15v-20,23, 24, 43, 49, 61v)、そのうちの5点がルカ、マルコ、マタイ、ヨハネの順番で、なかの1点はベアトゥス本の挿絵においても多用される獣頭人間型の福音書記者像として描かれている (f.61v)。特にベアトゥス本でもモーガン写本の場合は、「小羊の礼拝」(f.87)に「四つの生き物」として描かれた福音書記者像もまた、円形の枠内の左側にルカが配されている。こうしてルカの特徴的な配置の作例は黙示録周辺写本に残されていたのである。

四福音書記者のシンボルのうち、カロリング朝写本に顕著であったヨハネの優位性はすでにシャピロによって指摘されている³⁸。また、ノルデンファルクによれば、天上の存在として半身像で、しばしば天使の姿であらわされるマタイと、もともと翼を持つ鷲とは共に天上のものとして区別がされる³⁹。例えば、『ポワティエの聖書』(ポワティエ、市立図書館 ms.17)の「マイエスタス・ドミニ」(f.31)において上部のマタイとヨハネは青緑の、下部のマルコとルカは黄色に、それぞれメダイヨンの色を変えて描かれている。『960年聖書』の福音書記者もまた、上部のルカとヨハネを囲むメダイヨンの枠の色は青、下部のマルコとマタイが黄色であり、対としての照応関係が強調された可能性もあるだろう。さらに中央のキリストのマンデルラがそれぞれの枠を重ね、青と黄の二重に縁取られていることから、それぞれの福音書記者を合わせる、すなわち、四福音書の一致という対応関係⁴⁰が意図された可能性がある。執筆者はここで、左右の福音書記者像もある種の対応関係にあった可能性を指摘したい。同写本において、同様に福音書記者のシンボルが描かれる対観表に着目すると、翼の有無により福音書記者像の配置が分けられる傾向が見られる。そもそも『グンドヒヌスの福音書』のように初期中世の挿絵の少ない福音書では、冒頭挿絵の「マイエスタス・ドミニ」と対観表とは非常に近くに配され、数少ない挿絵の中であって、装飾面でも緊密に対応していた⁴¹。『960年聖書』の対観表は、写本を開いた場合、左側のフォリオに獣身の、右側のフォリオに有翼の福音書記者像を配置するという傾向が識別された⁴²。これは「マイエスタス・ドミニ」の福音書記者像の配置において、左に四足獣である牡牛(ルカ)と獅子(マルコ)、右に有翼の鷲(ヨハネ)と人(マタイ)が置かれたのは、この対観表の傾向と共通する。そうであるなら、対観表においては見開きの2フォリオで展開された翼の有無による天上的、地

³⁸ 註31を参照。

³⁹ Nordenfalk, C., "An Illustrated Diatessaron," *The Art Bulletin* 55, 1973 (Nordenfalk, 1973), pp.119-140, esp.125ff. ノルデンファルクは主題となったペルシアのタティアノスによるディアテッサロン(四福音書を独自にまとめたテキスト)に描かれた福音書記者像を論じるために、同様に全身が獣で、聖書も翼もない獣のシンボルを「地上的」とし、半身が雲に隠れ、翼を持つ獣のシンボルを「天上的」とし、前者をより早い段階に生まれたものとした。

⁴⁰ ヒエロニムスによる『マタイ福音書註解』の序文において各福音書記者のシンボルと四福音書の調和を示している。Kessler, H.L., *The Illustrated Bible from Tours*, Princeton, 1977, pp.36-58, esp.36.

⁴¹ Nee, 1987, pp.131-188.

⁴² 註24拙稿、pp.155-156.この対応関係は一部ベアトゥス本(8点)の冒頭の福音書記者像にもこの対応関係を見ることができる。

上のシンボリズム⁴³が、「マイエスタス・ドミニ」ではひとつの画面に集約されたのだと言えよう。

6. 二つの「マイエスタス・ドミニ」

最後に、『960年聖書』の「マイエスタス・ドミニ」(図1)と『ヨブ記註解⁴⁴』の「マイエスタス・ドミニ」(図10)を改めて比較し、福音書記者像の図像を中心に再検討を試みたい。

図10では2体の天使によって掲げられる巨大なメダイヨンの中に、さらに別の2体のケルビムに囲まれたキリストが顕現し、その下方には車輪に乗った福音書記者が配されている。2天使の手にする円形の枠には月と星が描かれ、内部には、銘文に記される通り、⁴⁵6枚の翼により体を覆うケルビムに挟まれたキリストが顕現している。この図像はイザヤ書の記述と、黙示録の四つの生き物とが対応し合い、新旧の聖書を繋ぐ「顕現」の画像として解釈されてきた。ウィリアムズが指摘した⁴⁶通り、通常であれば福音書の冒頭に配される「マイエスタス・ドミニ」が、ここではキリストの予型としてヨブを論じる『ヨブ記註解』のために、同写本の冒頭に置かれたに違いない。

『960年聖書』の「マイエスタス・ドミニ」と比較すれば、『ヨブ記註解』の同挿絵の図像は、同幅の黒い線ではっきりと縁取られ、均一に色彩が塗られ、マンドルラの外枠を囲む天使の手や、福音書記者像の重なり合う車輪、円に交わり上方に伸びる翼などによって、僅かな空間が生まれている。これらの特徴は『960年聖書』の同挿絵は、枠からはみ出すように描かれたキリストの衣、マルコやヨハネの翼にも認められる。これは同じ写本の旧約聖書の挿絵には見出せない特徴である。さらに『ヨブ記註解』では、キリストは画面左に、両脇のケルビムはそれぞれ中央にと、顔を傾けた側に視線を送っている。『960年聖書』のマタイも左か左上方に視線を送るように描写されている。しかし、その他の構成、人物の顔や体の向き、獣身と獣頭人間型といったモチーフの相違から、衣や耳、マルコ(獅子)の口の描写などの細部においても二つの挿絵は大きく異なる。例えばルカ(牡牛)は、それぞれ顔の傾きと角と耳朵の描写が共通していても『960年聖書』の場合は両眼が円形で描かれ『ヨブ記註解』のそれとは異なる。ヨハネは嘴と頭部、首周りの二重線は共通しているが、胸や背の翼に大きな差異がある。

⁴³ Nordenfalk, 1973, pp.125ff.

⁴⁴ フロレンティウスの『ヨブ記註解』は、「献辞」(f.3)、「アルファ」(f.1v)、「孔雀」(f.3v)、「マイエスタス・ドミニ」(f.2)、「キリストのモノグラム(XP)」(f.34)、「オメガ」(f.501)の挿絵を残している。Williams, 1972, pp.223-250.

⁴⁵ イザヤ書(6:2)では本来6枚の翼を持ち顔を覆う2対の天使はセラフィムで、叡智のシンボルである目を多くつけた天使がケルビムであるが、銘文では2対ともケルビムである。「Duo cerbin sex ale (sic) uni et sex ale (sic) alteri. Duabus velabant* faciem eius (sic) et duabus velabant pedes eius (sic) et in duabus volabant (sic) et clamabant (sic) alter ad alterum dicentes: sanctus sanctus sanctus (sic) ケルビムが二体、それぞれ六つの翼を持ち、二つをもって顔を覆い、二つをもって脚を覆い、二つをもって飛び交っていた。彼らは互いに呼び交わり、唱えた。〈聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな〉」。

⁴⁶ Williams, 1972, p.230; Id., 1977, p.55.

これらの相違から判断すれば、『ヨブ記註解』から『960年聖書』まで、15年の歳月の経過があるとはいえ、同じ作者の手によるものとは考えにくい。元来、この二枚の貴重な挿絵は、すでに1920年代に紹介されていた⁴⁷が、図像表現の相異が著しいため共通する主題の指摘にとどまり、様式的な比較はほとんどなされてこなかった。その理由として、『960年聖書』がサンクティウスによって制作されたと説明されてきた点が挙げられる⁴⁸。挿絵師帰属の問題は別稿に譲るが、仮にサンクティウスの手で描かれた挿絵であったにせよ、同じ主題について師フロレンティウスと大きく異なる表現を取った理由は再考すべき余地があるだろう。アユソやウィリアムズの研究から、『960年聖書』は943年に制作された『オーニャ聖書』の忠実な写しであると指摘されている⁴⁹。だとすれば、この挿絵も単にその聖書の「マイエスタス・ドミニ」を忠実に写した、と考えることも可能だろう。そのうえ、それを弟子のサンクティウスが描いたとすれば、表現上の差異は出て当然といえるかもしれない。一方、フロレンティウスは『960年聖書』の制作時には同修道院にいて、奥付にその名を残している以上、たとえ画筆を取らなかったとしても、写本制作に何らかの関与をしていた可能性は否定できない⁵⁰。その点で執筆者は、特に対観表においてはフロレンティウスの関与が少なからずあったはずだと見ている。二つの「マイエスタス・ドミニ」の福音書記者のシンボルと『960年聖書』の対観表に描かれた福音書記者像(図11)とを比較すると、それらは『960年聖書』の「マイエスタス・ドミニ」の福音書記者像よりも『ヨブ記註解』に近い特徴が認められる。図11は『960年聖書』の第1の対観表(f.397)であるが、福音書記者像の配置やポーズは、例えば体の向き、聖書を持つ手、翼の描写などの表現から、マルコである獅子の口を開けた表情にいたるまで、『ヨブ記註解』の福音書記者像をほとんど踏襲しているかのようである。この対観表装飾にフロレンティウスによる福音書記者の表現が引き継がれているとすれば、同写本の「マイエスタス・ドミニ」においては、これらの福音書記者像とは明らかに異なる表現がとられたのである。

では、二つの挿絵「マイエスタス・ドミニ」の図像学上の表現の差異はなぜ生じたのだろうか。先述したように、『960年聖書』の同挿絵が弟子サンクティウスによって描かれたため、その描き方が師と異なる、という説明は、対観表の福音書記者像の表現を考慮するならば成り立たないだ

⁴⁷ Cook, 1923, pp.31-60; Id., "The Earliest Painted Panels of Catalonia", 5, *The Art Bulletin* 11, pp.279-288.

⁴⁸ Díaz y Díaz, M.C., "El Escripatorio de Valeránica", *Veinte Estudios*, 1999 (Díaz y Díaz, 1999), pp.53-72; Gómez Moreno, *Ars Hispaniae: historia universal del arte hispanico*, 3, Madrid, 1951, p.406; Williams, 1962, p.11.

⁴⁹ Díaz y Díaz, 1999, p.63. 『オーニャの聖書』は新約聖書の断葉が12葉残されるのみで、挿絵はなく、ウィリアムズの論点は、17世紀に残された奥付の書写とイニシャルの類似である。11葉は La Hermandad de Sacerdotes Operarios Diocesanos に、残りの一葉はサント・ドミンゴ・デ・シロス修道院に分蔵されている。Williams, 1967, pp.281-286. 『オーニャの聖書』については以下を参照。Ayuso, T., *La Biblia de Oña: Un notable fragmento casi desconocido de un códice visigótico homogéneo de la Biblia de San Isidoro de León*, Zaragoza, 1945; Shailor, B., "Corrections and Additions to the Catalogue of Visigothic Manuscripts", *Scriptorium* 32, 1978, pp.310-312, esp., 312.

⁵⁰ Díaz y Díaz, 1999, p.63.

ろう。『オーニヤ聖書』を始めとする、より古い作例を忠実に写した可能性も残るが、現時点において挿絵が現存しないために結論を出すことはできない。ただし、現存する同系統の聖書から類推すると『オーニヤ聖書』では「マイエスタス・ドミニ」は描かれなかったということも考えられる。ウィリアムズによれば、『960年聖書』と同系統の『1162年聖書』（レオン、サン・イシドーロ王立参事会聖堂所蔵 Cod.3）は、『960年聖書』と同様に『オーニヤ聖書』を写したとされている⁵¹が、その冒頭挿絵に「マイエスタス・ドミニ」は含まれていない⁵²。『1162年聖書』の冒頭クワイアに落丁はなく、挿絵を写さなかったとは考えにくい。だとすれば、『オーニヤ聖書』にはなかった「マイエスタス・ドミニ」が『960年聖書』において採用された可能性も否定できない。そうであるならば、その際に、特徴的なキリストの描写、従来とは異なる福音書記者の表現が選択されたのであろう。挿絵師たちはカロリング朝以前にも遡る古いメダイヨン構成の枠組みを参照しながら、キリストや福音書記者の図像を一巻本聖書の冒頭にふさわしく再構成した、それにフロレンティウスも関与していたのではないかと執筆者は推定している。

おわりに

以上、『960年聖書』の「マイエスタス・ドミニ」挿絵における諸問題とさまざまな解釈の可能性を提示した。ロゴスの表現や福音書記者像の配置についての問題は、現時点ではこれ以上の推定は困難である。とはいえ、少なくとも『ヨブ記註解』と対観表との人物表現を比較する限り、フロレンティウスの同挿絵への関与はあったように想定される。それゆえに執筆者は、この挿絵をサンクトゥスひとりが古い作例を単に写した、という見解に疑問を提起したい。『ヨブ記註解』のそれとは明らかに異なる『960年聖書』の「マイエスタス・ドミニ」挿絵に見出せる類例のない特徴、とりわけ多くの旧約聖書挿絵を含む同写本を象徴するような白髪、巻物と冊子本の聖書は、ウィリアムズの言うような図像学上の知識のなさに起因するものではなく、同写本の冒頭挿絵として意欲的な発想図のもとに新たな創意工夫を凝らした成果であったのではないだろうか。

⁵¹ Silva y Verástegui, 1999, p.250.

⁵² 冒頭の挿絵は「キリストの系図」(ff.1v-4)と、キリストの受肉のアレゴリーである「鳥と蛇の戦い (f.6)」で終わっている。



図1 『960年聖書』 「マイエスタス・ドミニ」 (f.2)



図2 『グンドヒヌス福音書』
「マイエスタス・ドミニ」 (f.12v)



図3 『ヴィヴィアンの聖書』
「マイエスタス・ドミニ」 (f.329v)



図4 キリスト像 描き起こし

図5 『960年聖書』 ヨブ記 「サタンと会話をする神」 (f.181v) 部分





図6 エスコリアル写本
「天の大群衆が玉座の神を礼拝する」(f.142) 部分



図7 サン・ミリャン・デ・ラ・コゴーリャ修道院の
『教会会議議事録』(f.16v)



図8 サン・ミリャン・デ・ラ・コゴーリャ修道院の
『説教集』ヨハネ福音書冒頭(f.245v) 部分



図9 四福音書記者像 描き起こし



図10 『ヨブ記註解』「マイエスタス・ドミニ」(f.2)



図11 『960年聖書』第1の対観表-1(f.397)